

別れの時 —「時」の素顔—

濱里忠宜

はじめに

きょうは、三月という何かと忙^{せわ}しい時期にもかかわらず、大学・短大の教職員・学生のみなさんのほか、学外からも、卒業生、地元鹿児島大学の院生、市民の方々などこのように多くのみなさんをご聴講くださることになりました。まことに望外のことであり、恐縮の極みです。心より厚くお礼申し上げます。

鹿児島純心女子短大と女子大にお世話になって、いつのまにかずいぶん長い歳月を数えてしまいましたが、この職場に足を運ぶのも、あと僅かの日数を残すのみとなりました。高等学校での勤務13年、教育行政の職25年、短大・大学が非常勤時代を加えれば26年余、あちらに移り、こちらに移り、かえりみて教師一筋というにはいささか程遠く、まことに忸怩たる思いですが、みなさんのご芳情に支えられて今日の日を迎えることができました。牛の歩みのごとき教職人生とは言え、私なりのいささかの感慨をかみしめております。

じつは、このたびの東日本の大震災のあと、ずっと胸に重いものを抱えておりまして、みなさんの大切な時間をこんなことで割^きいていただいていたいいものかと、幾夜も悩んでまいりました。まわりの先生方のご意見を聴いたりもいたしました。しかし、これはやはり学校の教師としてのけじめであろうと思い直し、こうしてみなさんの前に立っております。亡くなられた方がたの鎮魂と、被災されたみなさんの一日も早い再起をお祈りしつつ、お別れの講義をさせていただこうと思っています。

さて、もうずいぶん昔になりますが、徒然なるままに手にした一冊の

本で、こんな話を讀んだことがあります。さる有名会社の副社長だった人の逸話を、金平敬之助さんという人が書いているものです。その副社長なる人は、けっして話がうまいとは思われなかったのですが、その講話は、社内でなかなか評判がいい。途中で眠る者など一人もいない。そのコツはいったい何だったのか…。金平氏は書いているのです。

「答えは簡単だ。眠らせるほど長い話をしなっただけである。」(笑)

もとより、短いけれど味のある話だったろうと思われれます。できることなら私もそんな話をしてみたい。しかし、そんな力量もありませんし、今日はとりわけそういうわけにはまいりません。「最終講義」という名がついていまして、これから1時間半のおつきあいをしていただくことになっています。なにとぞお赦しいただきたい。ただこの時間は、私の講義のあとに、女子大の藤尾清信先生がピアノを弾いてくださることもなっております。私の拙い話に退屈なさったら、藤尾先生の美しい演奏が待っていますので、そちらで私の講義のまずさを帳消しにして頂けたらと願っています。ちなみに藤尾教授は、不肖私が作詞いたしました歌詞に、いつも素敵な曲をつけてくださって、県内の幾つかの校歌ができております。じつはそんな間柄でもあります。その得がたい人生のご縁にもこの場を借りて深く感謝いたします。

第1章 旅立ちと別れ

生を問う

前置きが長くなりましたが、これから、「別れの時」と題し、〈「時」の素顔〉という副題を添えてお話させていただきます。これは要するに、私たちが「生きている」ということは、いったいどういうことなのか、どんな意味をもっているのかということを考えようとするものです。哲学の世界では、生 (Leben) とか実存 (Existenz) といった概念で語られるものです。あるいは、いまここに生きている、私たちの「いのちの息吹き」と言いかえてよいかもしれない。このいのちの営みを、「時」(時間) という視点に立って考えてみようと思っているわけです。

私たちが生きているということは、つねに、何らかの可能性をめぐり

別　　れ　　の　　時

て存在しているということです。私たちは、さまざまな可能性をめがけ、さまざまなものに関わって息をしている。そしてそれは、よくよく考えてみれば、刻一刻「時」を刻んでいるということです。あるいは、「時」を実現しつつあると言ってもいい。そのような、「時」（時間）の視点から生のありようを考えてみたいと思っているわけです。

お配りした資料の中の、詩人谷川俊太郎の詩⁽¹⁾から引用しますと、生きていくということは、泣けるということであり、笑えるということであり、怒れるということです。あるいはまた、のどがかわくということ、木もれ陽がまぶしいということ、ふっと或るメロディを思い出すこと、愛するということ…などなどであり、それらはすべてのいのちの息吹きそのものです。私たちは、人やモノ（個物）とさまざまなしかたで関わって生きています。何かを企てたり、失敗したり、何かを観察したり、何かの面倒をみたり、何かを使ったりなどなどして生きています。そうした関わりの中でのよろこびや悲しみが、生きていくことの証しなのです。私たちはこんなふうにして人生という旅路を選択しているのです。そうした「時」の刻みが人生というものです。そのようなありようが、実存（Existenz）と呼ばれている人間の現実の存在です。

ところが、私たち一人一人のこのような人間の存在^{ありよう}は、人間以外のさまざまなモノ（個物）の存在^{ありよう}とは、較べものにならない重い意味をもっています。なぜなら、モノ（個物）は、いつでも相互にほかのモノ（個物）と代えて用をなすことができます。いつでも代替がききます。しかし、私たち一人一人の現実の存在（実存）は、けっして代替がきかない。代替不可能です。私が今使っているこのマーカーが使えなくなったら、こちらのもう一つのもので書けばよい。しかし、こうして生きていく私たちの現実の存在、すなわち実存とは、誰にも代わってもらえぬ絶対的な生の選択です。つまり、私の人生はほかの誰にも代わってもらえない重い人生です。たった一度きりの、たった一つしかない旅路の選択なのです。

私の名前は、わが家の一番上の姉がつけてくれたものだと、幼い頃から聞かされてきました。姉は時に13歳だったといひます。この名がいい…と13歳の少女が言ひますと、両親はあっさりそれがいいよと言ひて、

(1) 谷川俊太郎詩集『いまほくに』（理論社、2005年版）

そのまま村の役場に届けたというんです。その姉は、長じて中国東北部（旧満州）の大連の病院につとめる身となっています。昭和初期のことです。故郷から遠く離れたこの異郷の地は、^{ちちはは}父母の住む遥かな地への望郷の念にかられつつも、姉にとってどこか懐かしい忘れられぬ思い出の地となっていたようです。大連は春になるとアカシヤの咲く美しいまちです。しかし同時に季節が巡れば極寒の地でもあります。その厳しい環境で病を得て帰郷する身となるのです。その病床にあっても、姉はなお、アカシヤの匂う季節の思い出を弟妹たち（私の兄や姉）に深い思いをこめて話していたといえます。

しかしながら、母たちの手厚い看護にもかかわらず、僅か19歳の短い生涯を閉じていきました。思えば大連という異国のこのまちは、短かった姉の人生の、僅かの青春の地だったのです。私の2歳下の弟は、亡き姉を送り出す時、お棺のはじめにしがみついて「お姉ちゃんを連れていくな…」と泣きじゃくっていました。弟4歳、私6歳の年でした。弟のその幼い姿が今も目に焼きついています。

野辺の送りがすみ、いく日かのさまざまな供養の行事がすんで、わが家に弔問の客足がめっきり減り静かな日々がやってきます。すると、母の悲しみはその極に達します。夕闇がせまって仏前に燭がともされると、母は、遠く満州の地から書きおくられてきた手紙と、10代の終りの姉の写真を握りしめて慟哭しました。そして、その時母がいつも口にした言葉があります。母は必ず「ごめんなさい」と言い、「お母さんが代わってあげたかったのに…」と口にしました。母は70歳を越え、80歳を越え、さらには90歳を越えて長く生きましたが、娘はずっと19歳のままです。私は幼い時から、この言葉を数えきれぬほど聞いて育ってまいりました。

しかし、人の人生は絶対に他の人に代ってもらうことはできません。先ほど申しましたように、いま、ここに生きている人間の現実存在、すなわち「実存」(Existenz)とは、けっして代替のきかぬ重い重い存在です。私たちの生 (Leben) の重さとは、代替不可能というそのありようの重さです。モノが代替可能な相対的存在であるのに対して、人間は、代替不可能な絶対的存在なのです。

そして、いま一度言いますと、私たちがこうして生きているというこ

別れの時

とは、つねに可能性をめぐって存在しているということであり、刻一刻「時」を刻みつつあるということです。ところがそのことは、よく考えてみれば、たえず生まれ変わっているということです。私たちは生まれ出ることと消えゆくことを同時にくり返している。さらに考えてゆけば、つねに生の終りに臨んでいる。生の終りがやって来つつあるということでもあります。もっと言えば、可能性をめぐっているということは、つねに同時に「別れの時」を秘めているということです。

したがって、「別れの時」と題するこの私の講義の要点は、私たちの生が、つねに同時に、始まりの時と別れの時（終りの時）を秘めているというこの「生の事実」、代替不可能なこの生の重さについてお話ししようとするものです。生の重さとは、代替不可能という私たちの存在の重さであり、そして、その別れの重さだということに触れてみようとするものです。別れの重さとは、あるいは「生の非条理」の重さと言ってよいかもしれません。それはまた、私たちの出逢いの意味の深さを語ろうとするものでもあります。

生と死と

いきなりややこしいことを申したかもしれませんが、私たちの生が代替不可能であり、つねに終りの時を秘めている存在だということは、まぎれもない「生の事実性」です。もし、私の話に退屈なさったら、私の話は必ず終るわけですから、ご安心なさって聴いてくださればいいのです。（笑）この時間は、いつかは「別れの時」すなわち「終りの時」が来るのだと信じて聴いてくださればいいのです。（笑）しかしそれゆえに、この時間は、二度と来ないかけがえのない「時」であって、先ほども言いましたように、私は今、さまざまな感慨と少なからぬ緊張の中にいるわけです。

NHKが「街道てくてく旅」というテレビ番組をやっていたことがあります。たしか、「東海道てくてく旅」とか「熊野古道てくてく旅」といった、旧街道をゆく旅番組です。旧街道の宿場町から宿場町へと、一日の旅をつないでいく番組ですが、必ず中継地となる宿場での到着シーンや、翌朝の、つぎの宿場への旅立ちのシーンが出てくる。これが何とも味わい深い風景になっている。そういう番組です。

例えば、あの旅立ちのシーンはじつは別れのシーンなんですね。つぎの旅へ向かう、もっと言えば旅の終りへ向かう別れのシーンなのです。旅人が旅立ちの歩を一步進めることは別れの一步を進めることであり、すでにその中に旅の終りがひそんでいるということです。旅立ちの第一歩は、つねに別れの第一歩です。人生という旅には、そんな奇妙な逆説(paradox)が秘められている。

谷川俊太郎は、「明日」という詩の中でつぎのようにうたっています⁽²⁾。

〈…明日のために / くらやみから湧いてくる未知の力が / 私たちをまばゆい朝へと開いてくれる…〉と、まず旅立ちの力をうたっています。だがさらに、〈…明日は明日のままでは / いつまでもひとつの幻 / 明日は今日になってこそ / 生きることができる〉とつづけて、「明日」はまだ現れぬ先の時点ではないと語りかけている。そして、〈…今日のうちにすでに明日はひそんでいる〉(傍点は筆者)と結んでいます。

私たちが、いまこうして生きているということは、たしかに、明日という可能性をめぐらしていることだと言えます。だが、私たちが向かっている明日は、まだやって来ない時間なのではなくて、まぎれもなくやって来つつある、もっと言えば、明日はもういまのうちにやって来ている、いまのうちに秘められている時間です。谷川もそう言っているように、私には思われます。明日はいまのうちにひそんでいるのです。すでに言いましたように、それは、私たちが刻一刻「別れの時」に臨んでいるということを意味します。「別れ」は、とどまることのない、私たちの「一つの存在の仕方」です⁽³⁾。あえて、20世紀を代表する思想家 M. ハイデガー (1889-1976) の言葉にならって言いますと、先ほどもちらっと口にいたしました、私たちがつねに「終りへの存在」(Sein zum Ende)⁽⁴⁾なのです。

考えてみますと、これはまさに「生」の逆説的事実です。私たちは、生まれると同時にたえず新たに生まれかわり、そしてたえず老いつづける

(2) 谷川俊太郎詩集『いまほくに』(理論社、2005年版)

(3) M. Heidegger, Sein und Zeit (1927, Max Niemeyer 版)

Der Tod ist eine Weise zu sein, die das Dasein übernimmt, sobald es ist. 「死は現存在が存在するやいなや、現存在が引き受ける一つの存在の仕方なのである。」(原祐・渡邊二郎訳、中央公論社、S 245)

(4) M. ハイデガー、Sein zum Ende 「終りへとかわる存在」(原・渡邊訳、同上、S 245)

ている⁽⁵⁾。もっと言えば「生」の終りに臨んでいる。人間存在とは、まずそういう矛盾を秘めた存在です。生きているということは、じつはそういう矛盾の生を生きているということなのです。

しかしまた、誤解のないように申しますが、先ほどもちらと触れましたように、私はここで、生を単に否定的・消極的にのみとらえようとしているのではありません。私たちの「いのち」は、つねに消えてしまうだけのものだと言っているのではありません。たしかに、私たちは生誕しつつ消滅している。生まれかわりつつ老いつづけている。生の終りへ向っている。だが、逆に言いますと、消滅しつつ生誕している。老いつづまぎれもなく反復して生まれている。私たちのいのちは、一つの死滅過程にありましようが、同時にそれは、一つのかげがえのない生誕過程でもあるのです。言葉をかえれば、出会いと別れを一つにして生きている。みなさんとこうして向き合っているこの時間も、けっして代替のきかぬ、刻一刻の^{せいたん}生誕過程であり、生の選択なのです。いささか抽象的な言い方に聞こえましようが、谷川俊太郎もつぎのようにうたっています。

〈ひとつの小さな願いがあるといい / 明日を想って / 夜の間に^{したく}支度する心のときめき / もう耳に聞く風のささやき川のせせらぎ〉。

この矛盾の「生」のときめきをうたっているものです。刻一刻生まれつつある生の輝きをうたっているのです。生きているということは、まちがいなく矛盾の営みです。私たちは生まれつつ死に、死につつ生まれている。出会いと別れが一つになっている。生と死が一つになっている。もっと言えば「在」と「不在」が一体化している。生きるとはそういうことです。しかし、深く生きるとは、その矛盾・非条理の生をこよなくいとおしむことにほかならないのではないかと、私は思います。

京都嵯峨野に住んでつぎつぎに傑作を発表してきた志村ふくみという染織作家がおります。自然の植物から取り出した色で糸を染めて布を織っている作家です。『一色一生』⁽⁶⁾という本を書いています、一つの

(5) M. ハイデガー、Sobald ein Mensch zum Leben kommt, sogleich ist er alt genug zu sterben. 「人間は生まれでるやいなや、ただちに十分死ぬ年齢になっているのである。」(原・渡邊訳、同上、S 245) A. ベルト及び K. ブールダハ編『ポヘミア生まれの農夫』からの引用。

(6) 志村ふくみ『一色一生』(来龍堂、1979年)

色をとり出すのに一生かかってもむずかしいということを言おうとして
いるのです。「一色多生」という表現もしておりますが、己れの芸のむ
ずかしさと真剣に向き合っている人の言葉です。

詩人大岡信によると、この人の傑作に、うすくれないというか桜色と
いうか、燃えるようなしかも深く落ちついた色の作品があるといいま
す。大岡は、京都まで足を運んでその作品に会いに行った時の感動を書
いています。作品と対面した大岡は、あまりの美しさにただ圧倒されて
います。この色を何から取り出したのかと大岡が聞くと、志村ふくみは
「桜からです」と答えている。その時詩人は、桜の花びらを煮詰めて色
を取り出したのだらうと思ったというんですね。ところが志村は、それ
は桜の皮から取り出すのであり、しかも、一年中どの季節でもいいので
はないのだと教えてくれる。それは、やがて春がやって来ようとして木
が蕾を秘めている時、すなわち、冬に別れを告げてまさに花ほころばん
として準備しているつかのまの時です。

そこには、冬への別れと春への旅立ちが一体となった姿があります。
消滅（死滅）と生誕とが一つになっている。死と生とが一つになってい
る。もしその時をのがしてうすみどりの葉桜の季節に同じことをやったら、
そこにはもはやあの美しい桜色はないのです。まさに花ほころばん
と木のいのちが燃え始めようとしている時、すなわち、冬に別れを告げ
ようとしている時、根も幹も枝も、そのいのちのすべてが、いわば青春
の色に輝き始めようとしている。その、「時」の色を頂いてきて、すな
わちその「存在^{ありよう}」を頂いてきて染めるのだと作家は言おうとしています。
それはまさに、「時」といういのちの輝きなのです。

つぎの句は俳人正木ゆう子の選によるものですが、別れと旅立ちの情
感を語りかけてくる味わい深い一句です。別れの時の、生の矛盾の景を
見事に切りとっています。

惜別もまた眩しくて冬うらら

福岡 悟

別れが眩しい…と作者は言っている。別れのさびしさと旅立ちの眩し
さを一句の中に凝縮している。

「冬うらら」はもちろん冬の季語ですが、「うらら」は春の季語です。
「冬うらら」とは、冬と春とが一つになった春近き季節の絶妙の季語で
あり、句は別れと旅立ちを、生のありようを見事にうたい上げた名句と

別　　れ　　の　　時

も言うべきでしょう。生とは、旅立ちと別れが一体となった矛盾のいのちの息吹きなのです。

春の別れ

このように、私たちが生きているということは、つねに別れを秘めているということです。もっと言えばつねに死を抱えているということです。しかもそれはずっと先にあるのではなく一瞬一瞬そうだとことです。あらたに生まれ出ずること（出現）と、同時に死滅していくこと（消滅）とが一つになっている。生と死が一体になっている。私たちの「生」はそういう矛盾の姿です。このことはしかし、すでに触れてきましたように、けっして「存在」の単なる否定を意味するものではない。存在しているというこの条^レ理と、つねに死を抱えているという不条^レ理とを一つにした、言うなら非条^レ理のいのちこそが人間存在です。この非条^レ理を背負ってそれぞれの旅路へ向かうのが人生というものです。その旅路の選択は、まさに代替不可能な重い選択です。その選択の深さが、私たちの生き方の深さだと言ってよい。志村ふくみの、山桜の皮を得る、「時」の選択も同様です。ただ一つの色を得るための一生を賭するとき選択だったわけです。

先ほど言いましたように、私の歩いて来た道には、僅かな期間でしたが高等学校の教員の職があります。その最後の年、県の教育長職というずいぶん多忙な職を命ぜられた時のことです。任にあった校長職を去ろうとする朝、こんな思い出があります。春三月、まもなく辞任式を迎えようとしておりました。まだ五十代の半ばに届かない頃です。

私はいつものように早目に出勤して、日課にしていた桜島に見えるヴェランダでのラジオ体操をすませ、一人校長室で過ぎた日々をしみじみと振り返っておりました。短い期間の勤務でしたので、何か大切な宿題をやり残したような気持ちでした。それは同時に、職員室の空気も、生徒たちとの出会いも忘れがたいものばかりで、大切な何かを取り上げられたような妙にせつない気分でもありました。事実、新聞が早々と報道してしまっ^{スクープ}たこともあって、朝刊の配られた朝は、一人の男生徒が朝早く校長室にやって来て、「先生はなぜそんなに早く出て行かれるのですか」と詰め寄るように聞いてくるといったことなどもありました。

こうしてあれやこれや後髪をひかれるような思いで辞任式の朝を迎えたのです。そんな複雑な思いが去来していた朝です。先生方の姿も少なく、校内はまだひっそりとしていました。

その時です。コツコツとドアをノックして一人の女生徒が「お早うございます…」とあいさつをしながらはいつてきたのです。「校長先生にお別れのごあいさつがしたくて…」と言ったかと思うと、私をじっと見つめてしばらくあとが近づきません。ソファーに腰をおろすように促しますが、なかなか動こうとせず、つっ立ったままでやっと語り始めました。

「校長先生に、どんなふう直接お別れの言葉をお伝えしようかと、とても悩みました。どんなに考えてもなかなか自分の気持ちを口に出してお伝えできそうにありませんでした。仕方がないのでお手紙を書くことにし、夕べ一晩かかって書きました。お別れのごあいさつになっていませんが、あとで読んでいただけませんか…」

少女はやっとそれだけ言って封筒を差し出し、まっすぐ私を見つめました。その目は、まぎれもなく、16歳の少女の澄んだ瞳です。私には一瞬、一人の平凡な父親として、わが家を離れていく娘たちを送り出した時のことがよみがえっていました。私は思わず、「辞任式がすんだら、もう一度校長室にいらっしゃい」と言いました。その時私の頭をかすめたのは、この生徒に何かを贈らなければいけない、この少女にこたえる、いま贈らねばならぬ言葉がある筈だという思いでした。そして、生徒が校長室を去ったあと、私はすぐその手紙の封を切って読み始めました。手紙には、ほぼこんなことが書いてあります。

「私が、朝登校して校門に立ち、一礼して顔を上げると、正面の校長室のベランダで校長先生がいつもラジオ体操をしていらっしゃいました。そのお姿を拝見すると、急に元気が出てきて、毎朝心の中で『先生おはようございます』とごあいさつして門を潜っていました。するとその日一日が、とても充実していました。そのお姿を、もう明日からは見ることができないのだ…そう思うと寂しくてしかたがありません。どんなふうにお別れの言葉を言えばいいのか解らなくなって、こうしてペンを走らせています…」

学校の教師という仕事に就いたことのあるごくふつうの人なら、どこ

別　　れ　　の　　時

かでおのれの愚かさや無力感に胸痛めた経験があるものです。少なくとも私自身は、かえりみてそうだったとしか言いようのない教師人生を送ってきました。そんな誤ち多き教師人生を送ってきた一人の凡庸な人間に、少女はこんな手紙を書きおくっている。読み進むうちに、私の胸には言いようのないものがこみあげ、いつしか目頭が熱くなっていました。そして、私は迷わず、「進む者は別れねばならぬ」と一枚の色紙を書いています。これから前へ前へと進まねばならぬ一人の若者への、私のささやかな言葉でした。

再び校長室にやってきた生徒にそのささやかな贈物を渡しますと、少女はじっと色紙を手にして見つめていましたが、いつしか涙ぐみ、何度もお辞儀をして、色紙を抱えるようにして校長室を出て行きました。その後ろ姿が、今も目に焼きついて離れません。遠い日の、春の別れでした。

「進む者は別れねばならぬ」⁽⁷⁾。これは私たちの世代の人間ならすぐに思い出していただける言葉です。私の胸には、青春のある時期に読んだ阿部次郎の『三太郎の日記』の一節がよみがえったのでした。阿部次郎は、ニーチェを評しつつ「進む者は別れねばならぬ。…凡そ進歩は唯別れるを敢てし、棄て去るを敢てする点においてのみ可能である。…」と書いています。

前へ進むということはつねに別れるということである。あるいは、別れねばならぬということである。さあ、その「いま」を大切に、前へ進んでゆきたまえ…というのが少女への私のメッセージでした。『三太郎の日記』は、ある意味で、進むことと別れることの表裏一体の人生の逆説を示唆しているとも言えます。私たちは、つねに可能性をめがけつつ、つねに「別れの時」を背負っている。そういう存在です。旅立ちと別れはつねに一体的です。そしてその一体性は、後でいくらか詳しく述べることとなりますが、生の一瞬一瞬という「時」の相^{すがた}そのものです。私たちは、この生の事実をこよなくとおしまねばならない。私はそう思っています。

いま一度先ほどの話に戻りますが、女生徒が帰ったあと、今度は男生徒が2、3人やってきて色紙を書いてくださいと言います。しばらくし

(7) 阿部次郎『三太郎の日記』(岩波書店、1939年版、P.83)

て、彼らが教室に帰ったかなと思われる頃、次から次へと生徒たちが色紙をもって校長室に現れるではありませんか。どうやら、先の2、3人の男生徒たちが、私の拙い字をみんなに見せびらかしたらしい。(笑)噂がたちまち広がって、遂に校長室の前に長い行列が出来てしまい、午前11時頃から夕方近くまで色紙に向かいつづけました。少年少女たちとの忘れ得ぬ別れの風景です。学校の教師にとって、春は、そんなさまざまな姿をした、人生という「時」の移ろいの意味をあらためて教えてくれる別れの季節です。それはある意味で、私たちの生の織りなしている「矛盾」を象徴する風景とも言えましょう。

第2章 「時」のふしぎ

時を問う

それでは、「時」とは、もうすこし仔細に見ていくと、私たちにどのような素顔を見せてくれるものだろうか。これからそんなことを考えてみたいと思います。「時」は、これまで多様に問われてきています。今もそれぞれの思想をベースにしたすぐれた時間論があります。しかし私は、ここで正面から時間論を語るにはその任にありません。これからお話ししようとするのは、「生」とは何かという問いの延長線上に見えてくる「時」の意味を考えようとするものであり、逆に「時」という視点で見えてくる「生」のありように触れようとするものです。すなわち、「別れ」の意味を考えようとするものです。

そこで、敢えてこれまで述べてきたことをまとめてみますと、旅立ちと別れの一体性というこの「矛盾」の風景は、人生という旅路のいずこにも秘められている風景であって、人生の諸相、すべてこのような相すがたをなしているということです。そして、そのことをさらに掘り下げて見つけてゆけば、すでに述べました通り、じつはそれは、私たちの生の一瞬一瞬の現象でもあるということです。生の刻一刻という「時」が、いわば「旅立ち=別れ」という矛盾の姿となっている。概ねこういうことだったと思います。

私たちはふつう、「時」とは、私たちの外に流れている川のような客

別　　れ　　の　　時

観的な実在として考えています。静かな田園の中を流れる川を船で下っていたら、いつのまにか川幅の広い、ビルの立ち並ぶ街なかの流れてきていた…、目が覚めたらすでに朝になっていた…、仕事に夢中になっていたらもう家路に就かねばならぬ時になっていた…。私たちはふつう、「時」をそんなふうにとらえています。そのように感じとっています。それもまちががなく一つの「時」のとらえかたです。ところが、たとえばハイデガーという人は、そんな客観的な「時」の姿とは違った、もう一つの「時」の現象を考えています。それは、私たちの生のありよう、すなわち「実存」に引き寄せられた「時」の素顔です。わかりやすく言いますと、私たちがこうして息をしてさまざまなものに関わり、さまざまな思いをめぐらしている、一瞬一瞬の「時」を考えていたように思われます。そうすると、その一瞬一瞬という「時」は、つねに消えゆく時であり、同時に新たに生まれ出ずる時なのですから、「旅立ち＝別れ」という私たちの人生の風景の、最も原初的な姿、すなわち「瞬時性」を指しているとも言えます。そしてそれはけっして、測定可能なある長さをもたない、一瞬の「起滅」を私たちに示唆してくれています。

ここで、ハイデガーという思想家について少し触れてみますと、この人は、その若き日から、「在る」（存在する）ということの意味を根源的にとらえようとした人です。言うまでもありませんが、哲学の根本問題は、「存在するもの」（＝存在者）が何であるかを問うことではなく、「存在する」（＝存在）とはどういうことであるか…を問うことです。言いかえれば「存在そのもの」を問うことです。ハイデガーは、その「存在」への問いをあきらかにしていくための通路として、まず人間存在への問いを進めていった人です。人間が「生きている」（生きて在る）ということをあきらかにしようとした人です。それがこの人の、ある意味では未完の作ではありますが、代表作『存在と時間』（Sein und Zeit, 1927）という本のテーマです。

私たちが「生きている」ということをあきらかにしてゆけば、やがて「存在そのもの」がどのような根源的な意味をもっているかはっきりしてくる…。彼はおおむねそんなふうを考えていたように思われます。なぜかと言いますと、いまこうして生きている私たち人間は、自分が生きている（生きてある）ことをすでに知っており、そして、いつの日か死

ぬことをも知っている生きものだからです。それゆえに、生きて^{いる}ことの意味を考えずにはおられない、他の存在者と比べようもない特別な生きものだからです。じつはよく考えてみると、このように、「存在」とか「存在そのもの」を問うというそのことが、いま、ここに生きている私たち人間の存在の一部なのです。ハイデガーは、そのような、人間という存在者を「現存在」(Dasein)と術語化し、その存在を「実存^{ありよう}」と呼んでさまざま問いかけをおこなったのだと思います。

もとより、人間存在への問いと言っても、この本のテーマは、あくまでも存在そのものを読み解く通路としての「基礎的存在論」と言われるものですから、きっちりと実存の哲学と名指しされるものではありません。少なくともハイデガー自身はそう考えていたと言ってよい。にもかかわらず、誤解を恐れずに言えば、人間が「生きている＝実存している」ということの意味本質について多くの示唆を与えずにおかない、そういう本だと思っています。私は今この場で、ハイデガーの存在論をなぞっていく立場にありませんが、すでに述べてきましたように、私たちはこの思想家から、私たちが生きているということは、じつは、刻一刻、「時」(時間)を刻んでいることなのだというに気づかされます。生きているということ(存在)の意味本質は、「時間性」(Zeitlichkeit)においてとらえることができるのだというふうを考えさせられます。志村ふくみが、春近き日の山桜の皮から桜色の美しい「時」を取り出したとき、それはまさしく、山桜の「存在」の本質を取り出していたのです。

このことを別な言い方をいたしますと、「生きて^{いる}」ということは、谷川俊太郎がうたっているように、「いま生きている」ということなんです。私たちが、たしかな形で言えることは、「いま、ここに生きている」＝「いまという時を刻んでいる」ということなのです。いまここにあって、何かと関わりながら、何かを気遣いながら息しているということです。

それでは、「いま、ここにいる」とはいったい何なのでしょう。か。「いま、この瞬間」とは、単に過去から流れてきて、やがて未来に向かって流れてゆくであろう、ある「時の区切り」を意味するのではない。「いま、ここにいる」とか、「時を刻む」ということを、もうすこし掘り下げてゆけば、どのようなことが考えられるのでしょうか。

時の矛盾

たしかに、私たちはふつう、「時」というものは、測定可能なある長さをもったものとして考えないわけにはいかない場面で生きています。私たちのごくふつうの常識的な時間の概念では、過去から現在へ現在から未来へと直線的に流れている、いわば川の流れのようなものであり、そして私たちは、その流れの上に浮んでいる小船のような存在としてとらえられており、この測定可能な直線的な時間概念によって、私たちは何の不自由もなく、きわめて便利で合理的な生活をしています。いわばこの測定可能な時間概念の恩恵に浴して生きていると言ってもよいかもしれぬ。このように客観的な実在としての時間の概念を、ハイデガーという人は「通俗的時間」(vulgare Zeit)と呼んでいます。

これに対して、ハイデガーはまた、実存論的な「根源的時間」(ursprüngliche Zeit)というものを考えています。これは先ほど触れましたような、私たちの外にある「実在」としての客観的な時間ではなく、私たちがいま、ここに生きていて刻んでいる実存としての時間です。私たちは、この時間論から、私たちの生のありようと根源的に切り離せぬ「時の素顔」のようなものを示唆されます。それは、すでに触れてしまったこととなりますが、測定不可能な、けっして長さを持たぬ生のままの時間です。いますこし説明を加えますと、たとえば私たちが、「いま」と言葉を発したとき、それはもう「いま」ではなくなっています。私たちはもう「いま」を失っています。「いま、ここにいる」という「時」は、けっして何分、何秒という「時」を指すものではない。あるいはもっと、10分の1秒ぶんや100分の1秒ぶんでも、さらにもっと極小・極微の時間の「いま」でもない。「いま」ここの瞬間とは、なんらの間隙かんげきをもたぬ瞬時の今です。根源的時間という視点は、そのような「時」というものの不思議を、時の素顔とでもいうものを私たちに気づかせてくれます。

はるかなむかしになりますが、旧制中学1年の時、私にはこんな思い出があります。

戦争で焼ける前の、中学の古い木造校舎の教室には時計などかけてなく、「質実剛健」を校是とする学校の規則で腕時計なども禁止されました。まず困ったのは、定期試験の期間中、今どのくらい時間が経ったのか解らないことです。そんなとき、黒板に時計の文字盤を描き、長

針と短針を書き入れて、「あと何分だよ」というサインを送ってくれる先生がいました。穏やかな、心の温かい先生でした。先生がスーッと黒板に円を描かれると、チョークの走る静かな音が私たちにはすぐ解ります。ところが、私は少し素直でない一面をもった少年でもあったのか、あと何分あるのだろうかと気になりつつも、そしてその先生の優しさを感じつつも、ぼんやりとあらぬことを考えておりました。

「9時50分」を示しているその動かない絵に目をやりながら、これはもう、ほんとうは「9時50分ではないのだ…」と、先生の優しさをよそにして余計なことを考えていたのです。時間は静止している絵ではないのだ、とそんな思いにふけてしまうよくない少年だったのです。敢えてむずかしく言えば、少年は、「動性」のない静止画像を見ながら、その稚い頭おきなで時間というものの不思議について考えていたのかもしれない。そして、このことはあるいは、一人の人間の中に、時間概念の通俗性（客観性）との上手なつきあいと、時間概念の根源性へのある種の目覚めが同居一体化している姿と断言していいのかもしれない。それなら、静止画像では表せない、空間化できぬ「いま」という不思議な「時」はどのように整理すればよいのだろうか。

どんな人が名付け親か知りませんが、「いまいくよ」「いまくるよ」などという女性漫才コンビがあります。(笑)丸っこい体の、どこか面白い形の服を着た女性と、やせ型のまあまあ普通の服を着た女性の名コンビです。(笑)考えてみれば、「いまいく」とか「いま来る」とかいうこの表現は、「いま…」と言いつつ、じつは到来しつつある時の動き（いわゆる未来的動性）を意味しています。

これに対して、「いま」という「時」を強調する言葉に、たとえば「只今」という表現があります。これは、「たった今」という意味です。「ただいま帰りました」とか「たった今始まったばかりです」といったふうに使われます。いずれも過去形の表現をしていますが、これもよく考えてみれば過ぎ去って消えてしまったのではない。単なる過去形ではない。文法上の言葉を使うなら現在完了形です。「半過去」などとも言われますが、「このようにあった」という動きが新たに生き戻って「今もこのようになっている」という動きを意味しています。過ぎ去って無くなっている筈なのに、たった今生き戻っている現象なのです。い

わゆる過去の動性だが、単なる過去ではない。

私たちが「いま」と口にした時、それはもう「いま」ではなくなっている。すなわち、「将にやってくるつつある動き」(将来・到来)⁽⁸⁾によって、口にした「いま」は消滅している。同時に新しい「いま」になっている。すなわち「既にあった動き」が新たに生き戻って「なおもありつづけている」(既在)⁽⁹⁾。新しい「いま」が出現している。すこし仔細に見つめていきますとこのように言えます。

またまたややこしい言い方になりましたが、じっと思いをこらして、「一瞬」としての「いま」を考えてみますとすぐに解ります。「一瞬」としての「いま」とは、いわゆる未来的動性と、いわゆる過去の動性が同時一体化している瞬時のいまそのものです。長さをもたぬとか、測定不可能と言ったのはそういう意味です。したがって、私たちがいま、ここに生きているということは、失われゆく生(死滅過程)と、生まれ出ずる生(生誕過程)とを一つにして存在しているということです。言葉をかえれば、私たちが生きているということは、「一瞬」という「時」の、矛盾の起滅を紡ぎつつあるということです。

時の深さ

ここで、ややくり返しになる部分もありますが、念のためいま一度、通俗的時間とか根源的時間とか呼ばれる概念を、私なりに対比し整理したうえで話を進めていきたいと思えます。それはいわば、長さとしての「時」と、深さとしての「時」の対比とでも考えてよいものでしょう。

まず私たちが通常もっている「未来」という概念は、「未だ現実(いま)にはなっていないが、やがて現実となるであろう先の時点(時間)を指しています。この通俗的概念に対してハイデガーという人は、いま将にやってくるつつある動性(動き)としてとらえています。人生を旅にたとえるなら、旅の終りはいわばさい果ての可能性です。しかしその可能性はまちがいなく自分のところへやってくる。その、「自分のところへやってくる」という動きそのもの(動性)こそが、単なる「未来」

(8) ハイデガーは、通俗的な概念としての「未来」に対して、将にやってくること(Zukommen)を意味する「到来」・「将来」(Zukunft)といった根源的な時間概念を提起している。

(9) ハイデガーは、通俗的な概念としての「過去」に対して、「既在」(Gewesenheit)といった根源的な概念を提起している。

という概念とは違う「到来」(Zukunft) とか「将来」といった根源的な現象なのです。

私たちは真の意味で死を経験することはできません。人生の終末に至ったとき、私たちはもはや、みずから死が何であるかを語ることはできないからです。しかし私たちは自分が必ず死ぬことを知っている。先まわりして(先駆して)、死を引き受け、死を見つめている。そうすると、死とは、未だやってこないある時点にあるのではなく、いつ訪れるかは不確定だけれど、つねに私たちの生のうちに切迫している可能性だということに気がきます。そのとき私たちは、ほんとうの自分に立ち帰っているのだと言えます。ハイデガーが、死は「一つの存在の仕方」と言ったのもそういう意味でしょう。その、先まわりした死との向き合い(ハイデガーの言葉で言えば先駆的決意性)から、私たちは、いま刻んでいる時というものの意味を深く自覚します。こうして、いまだやってこない「未来」ではなく、生の終りが、将にやって来つつある「到来」という、実存としての時間を、この人は考えていたように思えます。人間存在について、死が生を終り(到着点)を意味するものではなく、生そのものが「終りへの存在」とか「死への存在」であるとかいったことを強調するこの人の時間論は、まずはこのような視点から出発していると言ってよいでしょう。

したがって、私たちが通常もっている「過去」という通俗的な概念についても、それはふつう「過ぎ去ってしまった時点(時間)」を意味しますが、これに対してハイデガーは、過ぎ去ってしまったという単なる「過去」ではない、「既在」という概念を考えています。それは、「既にこのようにあった」ということがなければ、「このようにありうる」ということはないのですから、私たちのこの生において、過ぎ去ってもはや無くなってしまふということはないのです。たとえば私たちが旅の一步を踏み出した時、それは旅の終りへ向かう「消失」の一步であると同時に、旅の始まりとしての「生誕」の一步でもある。その生誕の一步は、過ぎ去って無くなる筈のものが生き戻っていることですから、「既在」という過去の時制となっていますが、これは、私たちが日常あまり意識せずに「今始まったばかりです…」などと言うように、過去形で表現されながら、現在完了形的な概念となっているのです。すなわち、「すで

別　　れ　　の　　時

に在ったし、今も在り続けている」という意味で、「既在」(Gewesenheit)と呼ばれ、「現在」との連続性が強調されているわけです。

こうして、「いま」(現在)という一瞬の「時」は、つねに終りへ向かって消えつつあり(終りが到来しつつあり)、つねに、始まりへ向かって生き戻りつつある(既在化しつつある)ことなのです。すなわち、俗に言う未来的動性と俗に言う過去の動性が同時一体化している現象と言えます。私たちは、そのかけがえのない「いま」(現在)という深みを生きているわけです。

「いのちの詩人」とも言える先の谷川俊太郎の「生きる」という詩には、〈生きていること／いま生きていること…〉というフレーズがくり返し出てきます。そしてさらに、〈いまいまが過ぎていく…〉とうたっています。そうなんです。「いま」という「時」は、いつも終ろうとしているのです。いつも終りが、すなわち「別れ」が、やって来つつあるわけです。そして同時に、新たな「いま」になろうとしているのです。これまで「あった」生が再び生き戻って、つねに新たな「いま、ここに」を生きている…。そう言えます。私がこれまでくり返してまいりました「時」の素顔とは、消えつつある時と生まれつつある時が一つになって同時進行している「いま、ここに」というこの一瞬の「時」です。消滅と生誕の同時一体の姿、すなわち一瞬の起滅の姿です。言いかえれば、「時」(時間)とは、終りへの動性(動き)と始まりへの動性(動き)が、つねに一つになって進行している矛盾の運動です。私たちは、そんな一呼吸一呼吸を生きているわけです。

やや脱線めいて申し訳ありませんが、鹿児島には、フランス小咄や江戸小咄とは一味違った薩摩小咄とでも言うべきおかしみのある小咄があります。若い頃教えられたもので、あるいは「からいも小咄」とでも言った方がいいのかもしれない、土の匂いのする小咄です。

むかしある村に、「手おくれ医者どん」と呼ばれて村びとに慕われていたお医者様がおられたといひます。命をあずかるお医者の手おくれ医者などと呼ばれて慕われていたという話自体がすでにおかしみのあるものですが、このお医者さん、村びとが診療所にやって来ると、診察しながら必ず「おはんはもう手おくれじゃ(あなたはもう手おくれだ)」と

おっしゃる。(笑) どんな軽いケガでもそうおっしゃる。それが口癖だったのです。そう言いながら、何とも優しい目をして治療してくださる。村びとたちはいつしか、「手おくれ医者どん」と呼んで慕うようになったというのです。つぎは、その名物先生のある日の逸話です。

〈愛称「手おくれ医者どん」の診療所でのある日の出来事—その日、村の子どもが柿の木に登って柿の実をちぎっていた。ところが、木に登っていた子どもが誤って足を踏みはずし、木の上から落ちてきた。ちょうどその時、その下をその子のお母さんが通りかかった。落ちてきた子どもを見ると、それは何とわが子ではないか。お母さんまっ青になって子どもを背負い、名だたる「手おくれ医者どん」の診療所に駆けこんだ。

「先生大変です。うちの子が木から落ちました」。すると先生すかさず、「そら手おくれじゃ。」(笑) お母さん、今度は真っ赤になって怒り出した。「先生、うちの子はいま落ちたばかりですよ (先生、うちの子はいま落ちこちたばかりごわんど)。」先生はさらにすかさず、「おはん何を言うか。そりゃあ落ちないうちに連れてこないと。」(笑)

ざっとこんな小咄です。何とも名状しがたいおかしみがありますが、「手おくれ」とは、このお医者様の、すっかり身についた、あるメッセージのこもった口癖だったんですね。それは、かぜひかぬように、病気をこじらせぬように、取り返しのつかぬことにならぬように…と、いつも、「いまひとときを大切に下さい」というメッセージにほかならなかつたのです。「いま」の重さと深さを表そうとした何とも飄飄たる小咄です。

私たちはそんなかけがえなき「時」を生きているのです。この、生と死を一つにした実存としての「時」という矛盾の相の自覚は、私たちの生の重さや深さを私たちに教えてくれ、私たちを自己自身に帰らしてくれるのだと私は思います。幕末の儒学者佐藤一斎の『言志四録』に、「聖人は死に安んじ、賢人は死を分とし、常人は死を畏る。」(『言志録132』)という章句があります。私たち「常人」にとって、死に安んずる聖人への道も、死を分とする賢人への道も、遥かに仰ぎ見る峰のような

別　　れ　　の　　時

ものです。しかし、「賢人は死を分とし…」といった語りかけは、「生者必滅」の理を理解し、その理と向き合うことの意味を示唆しており、私たちに「時」の深さ、すなわち生の深さへの道筋をつけてくれているように思います。それは、私たちが本来の自己自身へ目覚めていく道筋でもあります。

時の味わい

ところで、「時間」という日本語には「間^{あいだ}」という字がはいつていますが、これにはある間隔^{スパン}が表現されています。1時間とか1分とか1秒とかのある長さを持った「時」が表現されています。くり返し述べますように、私たちのごく日常的な（通俗的な）時間の概念は、このような長さをもって表されるものです。過去から現在へ、現在から未来へと直線的に流れる「流れの長さ」として表されています。暦もスケジュールも、その具体的な表現と言えます。

しかし、静かに思いを深めて「時」というものを見つめると、そのような日常的な計測時間とは違った素顔を見せてくれます。これもすでに述べた通りですが、ここで一つのアナロジー（類比）として考えてみます。たとえば、4キロメートルの海をフェリーで渡るのと、泳いで渡るのとでは、そのへだたりがまるで違います。フェリーで行けば僅か20分の4キロメートルが、同じ4キロの海の遠泳は、その10倍以上にあたる2時間以上もの、まさに文字通りはらかな波路とも言えましょう。私も12歳の夏、錦江湾横断遠泳の経験がありますが、泳いでも泳いでも目的地は遙かかなたにかすんでいる。少年たちにとっては、まるで太平洋を泳いでいるようなものです。それは、「空間」というものが、私たちの生のありようによって、客観的に測定された隔たりと異なることをも意味します。

そのように、60分の講義もひどく長く感じられる場合と、あっという間の60分として感じられる場合があって、そこには、ごく常識的な（通俗的な）時の長さを超えたものがあります。それは、私たちの生のありよう、すなわち実存（Existenz）による違いでありましょう。私たちはここで、長さをもたぬ時というものの根源性に目を向けざるを得ないことを示唆されます。これは、私たちの実存そのものとしての、長さをも

たぬ^き生 (primordial) の時とでも言うべきもの、測定不可能な根源的 (ursprünglich) な「時」、すなわち「瞬時」(時の起滅) というものもつ深い意味を、深い味わいを考えさせられるものとも言えます。

長さをもたぬ一瞬一瞬の「時」を、じつに巧みな比喻で提示している研究者がいます。ハイデガー研究の古東哲明氏⁽¹⁰⁾は、映画の一コマコマを連想すれば、根源的な時間の構造が容易に解けてくることを示唆しています。映画のフィルムの一コマコマはいずれも静止画像なのですが、それを繋いで動かしてゆけば、一つの物語としての動画 (movie) になります。そこには、いわば私たちの人生が映し出されます。あのフィルムの流れは、一つのコマが現われる瞬間と、一つのコマが消える瞬間とが同時一体化しています。すなわち、消えるもの (別れるもの) と現れるもの (生まれくるもの) とが同時一体化して一つの物語となっているわけです。

このように、私たちの人生の重さは、じつはその一刻一刻性の重さだと言ってよいでしょう。仏教詩人坂村真民の詩にあります。

〈大切なものは / かつてでもなく / これからでもない / 一呼吸 / 一呼吸の / 今である。〉

谷川俊太郎によれば、いまは、いま過ぎてゆくのです。そして明日は明日のままでは幻にすぎない。『三太郎の日記』は、進む者はつねに別れねばならないと言う。「時」(時間) とは、くり返し述べてきましたように刻一刻の矛盾の運動なのです。ある意味、不思議な現象とも言わなければなりません。しかし谷川俊太郎は、その矛盾の姿を、その逆説的な現象を、もっと言えば生の無常をじつに美しく歌い上げているのです。「時」を歌うことは、このように私たちの「生」とか「いのちの息吹」というものの無常を、珠玉のようにいとおしむということです。

生きていることは、冒頭言いましたように、つねに可能性をめがけて存在しているということです。それは、何かを企てたり、試したり、失敗したり、観察したり、また、何かの面倒をみたり、世話したりしていることです。さまざまに思いめぐらすことです。そのことによって、われも人も勇気づけられたり、喜びに身を置いたり、悲しみに沈んだりすることです。ハイデガーの言葉を借りるなら、何かを氣遣って生きてい

(10) 古東哲明『ハイデガー・存在神秘の哲学』(講談社現代新書)

別　　れ　　の　　時

ることです。別な言い方をすれば、「刻一刻」という「時」を刻んでいるということなのです。そしてそのことは、私たちが、私たちの外に客観的に流れている実在としての「時」に流されているのではなく、私たちのいのちが刻一刻の「時」を刻み「時」を紡いでいるのだということです。あるいは、時を実現しているということです。「時」とはまさに、外なる客観的実在ではなく、実存そのものと言うことができます。したがって、ほんとうに深く生きることは、時のほかなさを嘆くことではなく、その「いま」を、時の重さをどれだけ味わえるか、どれだけいとおしむことができるかということに懸かっている。真に生きるとは、この無常の「生」＝「時」を、深く味わって生きることではなければならない。生の意味を問うとは、生の意味を、すなわち時の意味を問うことであり、時を深く味わうことだと言えましょう。

第3章 「言葉」のふしぎ

いのちの必然

つぎに、「生きてい^る」ということの意味を、「言葉」という視点から考えてみたいと思っています。私たちが生きていくということは、言うまでもなく、「言葉」を紡いでいるということです。生きていくということが、「時」を刻んでいるということであるように、「言葉」を紡いでいるということもまた、私たち人間存在の証しです。時を刻むということ、「いのち」の根源的な現象^{ありよう}として考えるならば、「言葉」もまた、人間存在の最も深いところにある「いのち」の根源的な現象^{ありよう}とすることができるでしょう。

「人間」という言葉が「人と人之間」を意味するように、人間は、人と人との間^{あいだ}に成り立っている存在です。そして、その間を繋ぐために、すなわち生を共有するために言葉を紡ぎ出している生きものです。あるいは、私たちの根源的な存在^{ありよう}は、すでに言葉によって秩序づけられていると考えてもいいのだと思います。人間は、このように共に生きている「共存在」(Mitsein) なのです。「倫理」という語が、「倫^{なかま}の理^{みち}」を意味していることもそのことを教えてくれます。

ある草深い村の小学校であった出来事を何かで読んだ記憶があります。一年生の教室です。みんなで朝のあいさつをします。そのあいさつが終った途端、先生がいきなり質問したというのです。「みんな、どうしてお早うなんてあいさつするのかな?」。子どもたちはきょんとしてしまいました。そしてがやがや騒ぎ始めたというんです。「3+7はいくら?」とか「12-5はいくら?」といった質問なら、どんな風に考えたらいいか思考の回路が働きます。ところが、なぜあいさつするのか?という質問は、7歳の子どもたちにはどうにも捕らまえようがない。ぼんやりとした質問なのです。

そうしているうちに、一人の男の子が威勢よく手を挙げました。大声で叫ぶように言ったというのです。「先生、そらかんたんや。人間だからじゃ!」。そうなんです。人間だからあいさつする。グッド・モーニングという英語のあいさつも、ゲーテン・モルゲンというドイツ語のあいさつも、そして「よい^{ひより}日和ですなあ」という日本語のあいさつも、人間といういのちの必然の表出であり、いのちの^{メルクマール}微表と言ってもよいものです。それは何も条約などでとり決めたものではない。人間の内面から生まれ出た、人間存在の証しです。言葉は、人間という「いのち」の最も深い存在構造となっているものと言ってよいでしょう。

言葉の無常

私はくり返し、測定可能な、ある長さで示される常識的な時間概念ではなく、長さをもたぬ、一瞬一瞬の「時」の素顔を、すなわち「時」の無常というものを考えてきました。それはまさに、私たちの生が紡いでいる(刻んでいる)実存としての「時」の深さを意味するものでした。

このように、私たちの「いのち」の必然である言葉(語り)もまた、つぎつぎに現れつつ消え、消えつつ現れるものです。無常の、はかない「生」のありようです。それは、まちががなく私たちの生が紡いでいるものですが、私たちが一語を発した時、それはすぐに消えてしまいます。つぎの一語も、そのつぎの一語も現れつつ消えていく。そして時に沈黙の時をもつ。記録された文章を目で追う黙読という行為においても、声に出して読む音読という行為においても所詮は同じです。にもかかわらず、それらは一つの文脈をなしている。消えてしまったものが繋がって

別れの時

生きている。この、言葉の無常、すなわち言葉の起滅が、永遠の命を宿す詩や散文の世界を生んでいる。そして、「沈黙」(Schweigen)もまた、一つの文脈の中にあって深い真実を語っていることに私たちは気づかされます。沈黙という「語り」(Rede)があることに気づかされるのです。これもまた、私たちの生の不思議とも言えるでしょう。

仏教界で高名な高田好胤さんが、奈良薬師寺の管長になられた時の、こんな話があります。国宝薬師寺三尊で有名なこの名刹しんざんしきの菅山式しんざんしきとのことです。菅山式とは、住職の就任式です。この式に招かれた金平敬之介さんが書いています。

金堂の前に式壇が設けられ、多くの人びとがそれを囲むようにして式が始まり、県知事を始め名士と呼ばれる人びとの祝辞が延々とつづいて、型にはまったその長い演説に人びとは倦み疲れていました。そんな時です。順が来て初老の婦人が壇上に立ちました。今は亡き亀井勝一郎夫人です。亀井勝一郎⁽¹¹⁾と言えば、近頃再び脚光を浴びている太宰治の親友だった人です。著名な文芸評論家、美術評論家です。とりわけ大和古寺を愛した人です。私どもの世代が青春の日に愛読した、きらきらした知識人の一人です。

マイクを前にして、夫人は何かをこらえるようにしばらく黙ったままでした。人びとはハラハラしていました。その時です。一瞬夫人の体が春の日ざしの中をかすかに動いて、さもいとおしそうに右手の三重の塔を見上げました。そして夫人はやっと口を開いた。「亀井はこの塔をとりわけ愛しておりました」。それだけ言ってあとは絶句しました。夫人は嗚咽にたえかねてそのまま壇を降りてしまったのです。会場は一瞬静まりかえりました。間をおかず、会場には万雷の拍手が湧き起こりました。あとの人たちの祝辞などはほとんど覚えていないと、金平氏はそんな意味のことを書いています。

胸を打つ、じつにいい話です。一瞬の沈黙が、わずかの言葉が、人の心を動かさずにはおかぬふしぎな力をもっていることを教えてくれてい

(11) 亀井勝一郎(1907-1966)は、旧制山形高校から東大美術学科へ進む。プロレタリア文学運動の論客から日本浪漫派に転向。戦後『現代人の研究』で読売文学賞、『日本人の精神史研究』で菊池寛賞。文芸評論、美術評論で、とくに戦後読書界に高い地位を確立、太宰治のよき理解者でもあった。

る。沈黙 (Schweigen)⁽¹²⁾は、語り (Rede) 以上の語りであり、饒舌が真実を失うこともあることを教えてくれている。これもまた一つの逆説です。そして、この逆説もまた、言葉の不思議、「いのち」の不思議とも言えるでしょう。ここでは、沈黙が、なくてはならぬ文脈をなしている。それは、語りと沈黙が一つになって真実の文脈をなしていることを意味している。言葉のはかなさというか無常というか、その姿の中に、私たちは、言葉の真実、言葉の永遠を見ることができます。

音の無常

ここまで私は、私たちが刻んでいる「時」とか私たちが紡いでいる「言葉」のもつ不思議というものについて触れてきました。目を凝らせばそこには、刻一刻の、逆説的とも言うべき「いのち」の相貌が見えてきます。このことを比喩的に教えてくれるのが「音」の世界です。

たとえば私がいまここでピアノのキーを叩きますと、音はたちまち現れますが、同時にたちまち消えてしまいます。現れつつ消え、消えつつ現れるのが音であります。これもまたまことにはかない、無常の世界です。その無常の音を組み合わせたのが音楽です。音の消滅することと、同時に出現することとの一体性が、そしてその組み合わせが音楽美とも言えます。ちょうどそのように、たとえば植物は、花も実も、つねにその「いのち」の終りを告げつつ同時に「いのち」の始まりを告げている。染織作家志村ふくみの、春を迎えんとする山桜の皮のいのちも同様です。冬を終えんとしつつ、同時に春を迎えんとしつつ蕾を抱いているあの季節の桜でなければ、あの美しい桜色は出せない。終らんとする時と始まらんとする時の色です。私たちの生も、生の織りなす詩や音楽の世界も、この消えゆくものと現れるものの、矛盾の自己同一性といえますか、同時一体性といえますか、そういった矛盾の運動にほかならない…。そんなことを私なりに考えてきたつもりです。すなわち、生の無常ということとその重さについて話してきたつもりです。

私たちの生の終りは、私たちに向かって一瞬一瞬やって来つつあります。あるいは、一瞬一瞬のうちに潜んでいます。これもすでに述べたように、私たちが生まれるや否や引き受けなければならない「一つの存在

(12) ハイデガー「沈黙すること (Schweigen) は、物言わぬことではない」(SZ, S.165)

の仕方」です。ドイツ語の「時間的」(zeitlich)という言葉で辞書で引きますと、「無常の」とか「はかない」といった語意が出てきます。しかし重ねて言いますと、私はここで、生の矛盾を見つめることによって、私たちの生を常に否定的・消極的に強調しようとしているわけではありません。私たちの「いま」は、まちがいなく「在って無い」ようなものです。つねに同時に現れつつ消え消えつつ現れている。そんな無常ではかないものです。そしてその無常性は、そのまま矛盾の自己同一性ということであり、私たちはそこから逃げ出すことはできない。それをそのまま認めなければいけない。そんなことを言っているわけです。しかしその無常は、即常住、即永遠の相を私たちに教えてくれるのだと考えるのは許されましょう。少なくとも私はそう考えます。そう考えれば、私たちの一日一日は、単に儂い一日一日ではなく、つねに新しい一日一日でありつづける筈です。

もうはるかなむかしになってしまいましたが、まだ^{はたち}二十歳にならない頃のこんな思い出があります。その頃、NHKのラジオで、たしか「思い出のメロディー」という番組をやっておりました。放送局に寄せられた手紙をもとに構成されていた番組です。ある日、つぎのような思い出を綴った朗読が流れてきました。戦争にまつわる悲しくも美しい物語です。

手紙の主は、戦争中、中国東北部の旧満州のあたりにいた人でした。^{いくさ}戦敗れすべての家財道具を捨てて、命からがら祖国日本へ帰り着いた人の物語です。自分の命を守ることがそれこそ命がけで、わが子までも死に追いやった人びと、幼い命を中国人に託してしまわなければならなかった人びと、極寒の地で遂に死に追いやられた隣人たちなどなど、日本人は言語に絶する悲劇を背負って帰国してきました。その戦争の一つの秘話です。

その人には、大切な大切な愛蔵の品がありました。長年かけて買っためたクラシックのレコードです。とりわけショパンの「幻想即興曲」(嬰ハ単調作品66)は、数えきれぬほどくり返して聴き、宝のようにしてきたものです。そのレコードを、戦争をしてきた相手国の人たちに奪われるか壊されるか、あるいは捨てられるかしなければならぬ。胸を裂かれるような思いでした。

ある日、この人は決心しました。略奪される前に焼いてしまおう。そう思ったのです。そして、その大切なレコードに火をつけて燃やし始めました。わが身を切るような決断です。火はめらめらとその愛するレコードを焼いていきます。すると、その火の中から聞こえてくるではありませんか。あの幻想即興曲が、激しく、静かに、そしてせつなく美しく、焰の向こうから聴こえてくるんです。涙がとめどなく流れてきます。ラジオは、その悲しい思い出と共に、ショパンのあの名曲を流してくれたのです。

若かった私は、ラジオの前から動けなくなりました。涙がこみ上げてくるのを抑えることができなかった。そこには、まさに永遠の名曲が、焼かれて消失しつつそのまま生きて流れている。見えなくなったものが見え、聞こえなくなったものが聞こえている。いわば、「永遠の相」を私の前に提示してくれている。たしかに一つの音も、それらの音の組合せとしての音楽も、時と共に消えてゆきます。ある意味で無常な、はかない存在です。にもかかわらず、言葉同様、私たちの生の常往・永遠の相を示唆してくれているのです。

第4章 大きな別れ

幻の単位

さて私はこれまで、生きていくということは、旅立つということであり、それは同時に、つねに別れを秘めているということだということを経験として話してまいりました。それは別の角度から言いますと、人生の出会いとは別れの始まりであり、出会いと別れはつねに一体化したものだということをも意味します。人生は、そのような出会いと別れの連続する旅です。そういう意味で人生は無常（zeitlich）です。はかないものです。しかし、その旅路には、いつまでも生きつづける大きな出会いがあり、それは同時に大きな別れとなっています。「出会い」（Begegnung）とは、「他者が自己の中に生きつづけること」です。したがって、出会いの深さは同時に別れの深さを意味します。出会いの重さは同時に別れの重さです。

別れの時

そして、出会いの条理と別れの不条理を一つにしたまま私たちは生きています。その条理と不条理を一つにしたいわば[・][・][・]非条理とでも言うべきものが私たちの人生です。その大きな[・][・][・]出会いと[・][・][・]別れ[・][・][・]の一端に触れて私の講義のしめくくりの章とさせて頂こうと思っています。

私は、この学園の短期大学と大学で、さまざまな学生に出会い、さまざまな失敗も重ねてまいりまして、いまだに心の[・][・][・]澱[・][・][・]のようなものが[・][・][・]胸底[・][・][・]に沈んでおります。同時に、慰めにみちた[・][・][・]言葉[・][・][・]や[・][・][・]行動[・][・][・]を残して去っていった若者たちに少なからず出会ってまいりました。それらの忘れ得ぬ思い出の中から、きょうはその一つだけを回想させていただきます。

あれから、もう何年になるのでしょうか。ある日のことです。一人の学生が研究室を訪ねてきて、私の講義（哲学）を受けたいと申します。その時教務課の履修登録の締切りはすでに過ぎておりました。「期限が過ぎていたので単位はやれそうにないのだが…」と言いますと、学生は、「単位はとれなくてもかまいませんので、講義だけ聴かせていただけませんか」としきりに言います。どうやら、お母さんと話しているうちに、どうしても受けたいと思うようになったらしいのです。ほかにも時折そんな学生がいなかったわけでもないのです。私は、それでよかったです、と出席を認めたのです。

学生は、後ろの席をとって授業を受け始めました。ところが、その受講態度たるや、ひと言で申しますと、「最も熱心なる受講者」でした。丁寧にノートをとり、よく聞き、時にほほえみ、時に考えこんで聴いています。私は、「単位はやれそうにない…」と口にしたことに罪の意識のようなものさえ感じ始めました。ちょうどその頃、講談社から出ていた私の本が再版されて私の許に送られてきておりました。私は急いで学生を研究室に呼び、「単位をやれなくて申しわけない。せめてこの本を貰ってほしい…」と、そう言って署名した一冊を差し出しますと、彼女は一瞬顔をほころばし、「ありがとうございます。もったいないです…」とくり返し言いながら、深いお辞儀をして研究室を出てゆきました。

やがてレポート提出の時期がやってきました。私は、その真面目な学生の提出物を読めないことに一抹のさびしさをも感じながらレポートを読んでおると、何と、提出義務のない彼女の報告書が出てくるではありませんか。驚いて読んでいきますと、端正な文字で綴られたじつに

立派なレポートです。心を注いで書かれた模範的な答案です。受講期間中、彼女は一度だけ休んだことがあります。読み進んでいきますと、最後に、そのことに触れてつぎのような一文が加えられている。

「単位は頂けませんでした、先生のご本を、単位以上のものを頂けて、私には言葉もありません。受講中、一度だけ休んでしまいましたが、あの日は母の重い手術の日で病院におりました。おゆるしてください。私はあの日、母よ死なないで…と祈りに祈っていました。先生は講義の中で、〈深く悲しむ者は深く喜ぶことができる〉とおっしゃいましたが、今は、その言葉の深い意味が胸によみがえっています。」

少しはしょってしまいますが、こんな内容です。私は読みながら、危うく涙をこぼしそうでした。私は講義の中で、人間の出会いと別れが、また喜びと悲しみが、紙の表裏のごとく一つになっていることを話したのでした。それは、別れも悲しみも、生きているものが受容しなければならぬものであり、そのことによって、その生が一層深くなることを意味するものでした。いま申しましたように、私には、忘れ得ぬ足跡を残して私の前を去っていった多くの学生たちの思い出がありますが、遂に「幻の単位」となってしまったあのレポートを思い出すたびに、神ならぬ人間の営む、教師人生の運命とでも言うべき胸の痛みを感じずにはおられません。そして、人生という旅路の時の長さではなく、時の深さ、すなわち生の深さの意味を教えられます。

人はつねに「別れ」を背負っており、それゆえにこそ生の無常に耐え、生の非条理をこよなくいとおしまねばならぬ存在です。私たちが偶然の出会いと思っているどんなささやかな出会いも、それは何らかの必然の契機なのだと考えるべきで、そんな人生の旅路に、どんな深い意味が隠されているかもしれない。それが、人間という生きものの代替不可能な営みでありましょう。

戦火の少年たち

いまひとつ、わが生涯の師とも言うべき、今は亡き西村一意（俳号数）先生との出会いを話しておかなければなりません。少年の日、学期末試験の教室で黒板に時計の絵を描いてくれたあの先生です。温厚誠実にして、静かに燃えるものを内に秘めておられた先生でした。

別れの時

先生は、二十代の初め高浜虚子に認められた俳人です。ある時、先生がまだ二十歳を過ぎたばかりの頃の、ホトトギスの大会に出席された日の思い出を話してくださったことがあります。会場の一隅にいた先生の耳を疑う大きな出来事が、会場いっぱいに流れたというのです。壇上に立った高浜虚子の口から最初に洩れ出た一句は、何と、若かった先生の一句でした。

早梅や白雲ゆきてやまざる日⁽¹³⁾。

春の百花にさきがけて寒中に咲く早梅。春近き空の青の中を流れてやまぬ白い雲。青春の思いと重なる美しい句です。先生はその時のことを、体じゅうがわなわたと震えた、とおっしゃったことがあります。そうして先生の俳句人生が陽光を浴びてゆくのです。俳句が先生のかげがえのない伴侶となってゆくのです。そして先生は同時に、今申しましたように、つねに生徒たちの魂を鼓舞し、思春期の悪童たちをその温顔で包んでしまわれる稀有の教育者でした。

俳人西村数の世界には、どこか、詩と教育がその人格の中に溶融一体化しているようなところがあります。たとえば、先生の句集の随所に数多く学校の風景や生徒たちの横顔や後ろ姿が詠まれています。僅か十七音の中に、一人の教師の深い慈しみと悲しみがにじんんでいます。たとえばつぎの句はほんの二、三例に過ぎませんが、味わえば私たちの胸底深くしみてくるものがあります。

卒業やプールの丘に帽を投げ
幸福に卒業式の教師われ
教卓に何か花あり大試験⁽¹⁴⁾

私は遂に俳句の弟子としてその道を追わなかった不肖の教え子です。しかし、気がついてみたら、できの悪い教師ではありましたが、同じ教師の道を選んだ者の一人となりました。これも出会いの不思議、出会いの必然というものでしょう。

昭和19年12歳の春、私は旧制鹿兒島一中（現鶴丸高）に入学しました

(13) 西村数句集『早梅』（文進社、1973年、P.7）

西村数・大岳水一路共著『南日本歳時記』（南日本新聞社、1983年、P.22）

(14) 西村数句集『早梅』（文進社、1973年版所収）。旧制一中のプールは小さな丘にあった。「大試験」とは普通の定期試験とは異なる、卒業試験・学年末試験などを指す。（季・春）（大試験山の如くに控へたり 虚子）。

が、先生もその年にこの学校に赴任しておられます。のちに私は、その頃詠まれた先生の一句を頂いております。「入学す白風呂敷の一中に」⁽¹⁵⁾というその句は、私にとって大切な記念の一句ですが、白い風呂敷包みは旧制一中の象徴でもありました。「質実剛健」を校是とするこの学校では、カバンなど持たせず、木綿の白い風呂敷包みに下駄履きが校則となっており、どこから見ても一中生と解るようになっておりました。その少年たちの春の風景を詠まれたのがこの一句です。爾来五十有余年先生の警咳に接してまいりましたが、先生ほど教え子に慕われた方は少ないだろう…と言っても言い過ぎではないように私には思われます。その略歴を辿りますと、旧制一中から鶴丸高校で長い間国語の担当として教鞭をとられ、やがて県立高校の校長や役所の課長職に就かれ、定年後は、大学で講義に立ちつつ事務局長などをお務めになっていらっしゃる。その先生が、ある時私に、しみじみとおっしゃったことがあります。ぽつりぽつりと二つのことをおっしゃったのでした。

「ぼくは何より、ずっと国語の教員だったよ」とおっしゃり、つぎに「ぼくは俳句をやってきて幸せだった」と、しみじみ口にされました。校長職にある時も、課長職にある時も、ぼくはやっぱり国語の教師でありつづけた…、俳句を愛し、俳句と共に生きてきた…。そういう意味です。徹底して一教師であり、一俳人でありつづけた人だったのです。

先生は、太平洋戦争の戦雲暗くなった昭和20年、学徒動員によって鹿見島一中の四年生（現在の高一）を引率し、長崎県佐世保にあった旧海軍工廠に赴いておられます。軍事工場の割れるような騒音の中での苛酷な労働、敵機しょういだんの焼夷弾によって焼き尽くされた瓦礫のまちを越えて出勤する日々、粗悪な食事のために身体の不調で苦しむ生徒たち。十代の少年たちと、少年たちを率いる先生たちの苦悩の日々を、先生は、エッセイ集『あしの芽』に克明に記しておられます。ひどい腹痛と下痢、高熱に苦しみ、燈火管制下の暗い宿舎の廊下を、トイレに行き着くまでに間に合わず点々と便をこぼしてゆく生徒たちがいます。翌朝、先生はそれを拭いてまわっておられます。しかし出勤の時刻になってもつぎつぎにトイレへかけ出す者がいて、なかなか整列できない朝もあったと先生は書いておられます。

(15) 西村数句集『早梅』（文進社、1973年版所収）。

別　れ　の　時

そんな中、一中生たちは、ポケットに岩波文庫などをしのばせていて監督の兵隊たちから殴られた者もいたことを、戦後の焼跡につくられたバラック建ての教室で話されたこともあります。『あしの芽』に、その頃の思い出を記した「学徒」という一文がありますが、それは、終戦記念日まじかの感慨を記されたものです。

「…こうした困難の中に、わたしの忘れることのできない場面がある。工場内へは物を持ちこんではならないおきてである。入口で厳重な身体検査があるのだ。しかし生徒たちはポケットに英語の単語カードや参考書をしのばせている。そして昼食後の休憩時間など、物かげにいてはこれを開いているのだ。かれらはただ学ぶことを楽しんでいるものようだ。けたたましく空襲警報が鳴る。四散して他の工員とともに防空壕へかけ込む。その壕の中、入り口に近い所にしゃがんで、無気味な沈黙の間を、無心に英単語帳を開いている十七歳の少年の姿を、わたしは、今、神の姿のように思い起こすのである。」

戦火の中の少年の姿を書き留めた貴重な記録です。私はこの一文に出会った時、体じゅうに電気が流れたような不思議な感動を覚えました。しかも先生は、この少年の姿に触れて、さらにつぎの一文をつけ加えておられます。

「学問どころではない、という人もあろう。だがわたしはそうは思わない。国も社会も中正の学問によって維持され、その学問の基礎のない手が年少の学徒なのだ。そしてわたしのごときは、まじめに、そういう人の相手をしていれば足りるのだと思っている。／終戦記念日が近いので、思い出して、これを記しておく。」

この結びの一文には、生涯一教師を深く自覚しておられた先生の人格が、強くにじみ出ているものを感じさせられます。

ひとひらの雲

私は今から8年程前、少し長い入院生活をいたしまして、多くのみなさんにたいへんご迷惑をおかけしました。入院中4回も手術室にはいるという経験もいたしましたが、手術と手術の間に、どうしても避けられぬ講演や会議がはいっていて、主治医の先生に特別の手当てをして頂いて恐る恐る出かけねばならぬという始末でした。そんな折、私の入院の

ことを耳にされた西村先生が、旧制中学時代からの同級生たちに方方^{ほうぼう}電話をしておられたのです。先生はその時すでに90歳を超え、しかもご不自由な車椅子生活になっておられました。「君たち、瀧里君を今のままにしておいてよいのか…」という電話だったようです。手足のご不自由な車椅子生活の先生が、むかしの教え子の療養生活に胸を痛めておられたのです。もとより、その前に多くの友人たちが見舞いに来てくれたのですが、遂にある日、そのうちの一人から電話がはいりました。

「西村先生から何度も電話が来るんだ。『君たち、このままじゃいけないだろう。東大病院でもどこでも、もっと大きな病院に移したらどうだ』、と先生はそうおっしゃっている。とても心配していらっしゃるから、まずは先生と連絡をとってほしい…」

友人は、元鹿児島県副知事をしていたI君です。先生はそうくり返しおっしゃっているということです。受話器を手にし、私は何とももったいなくて言葉が続きませんでした。友人の電話を切ると、私はさっそくベッドの上から先生に感謝の電話をいたしました。すると先生は、堰^{せき}を切ったようにおっしゃるのです。「寺脇教授がいる。寺脇君はぼくのむかしの生徒だが、東大医学部を出てアメリカに留学し、のち信州大学教授になった偉いお医者様だ。ぜひアドバイスを受けるように…」と、電話番号までおっしゃるのです。

結局、これもベッドの上から信州の寺脇教授に直接電話することになりました。高校の後輩ということではありましたが、一度も面識のない先生です。私は勇を鼓して細細^{こまこま}と病状を話し、やがて術前・術後のデータを送りました。それは、寺脇教授のほか偉い先生がたの手にも渡り、また手紙のやりとりなどもさせて頂くという、言葉に言い尽くせぬほどお世話になってしまったわけです。その何度目の電話だったか、電話を切ろうとする時、「もしや満典^{まんてん}君のお兄さんでは…」とおっしゃるのです。満典とは、高校・大学で2年後輩の私の弟の名前で、音読みのいわば愛称になっていたものです。寺脇教授は、その弟の同級生だったので。まさしく、出会いの不思議ともいうものでありましょう。

私はその間に、西村先生から2通ものお手紙を頂いています。1通目のお手紙には、入院生活への励ましやら、先生ご自身の入院生活のご体験やら、そして寺脇教授のことなど、細細^{こまこま}とあたたかい言葉が綴られて

別　　れ　　の　　時

ています。車椅子の身の九十路の先生が、こんなにも胸を痛めてくださっている。お手紙を手にして、不肖の教え子はただただ胸がいっぱいになるばかりでした。

その手紙をくり返し読んでおりますと、一箇所だけどうしても文章が繋がらないところがあります。何度読み返してもおかしい文脈になっている。便箋が一枚だけ抜けているような気がする…。2、3日しましたら、先生の第2信が病院宛に届きました。封を切って読み進んでいきますと、ハッといたしました。先の手紙の中の便箋一枚が同封してあり、不手際を詫びた一文が記されています。先生は、先にも少し触れましたが、ご病気のあと、片手もご不自由になっていらっしやる。「本の頁をめくるのに時間がかかる…」、とおっしゃったこともあります。そんな先生が、最初の手紙を封筒にお入れになる時、そのご不自由な手でポトリと一枚落としてしまわれたのです。そのことに気づかぬまま投函を託してしまわれたのです。私はただ、言葉を失ったままお手紙を手にしておりました。わが胸底むなぞこに静かに沈んでいる永遠の師恩であります。

ここに、『桔梗庵雑記』という先生のエッセイ集があります。「桔梗庵」とは、先生の書齋に、ご自身で名づけられたものです。この本は、先生が亡くなる直前まで筆をとられた最後の著書です。「あとがき」まで筆が及ぶことなく逝ってしまわれた絶筆です。その「あとがき」だけが、学校の教え子であり、先生について俳句の道を歩いている松元胡笛氏によるものです。95歳の大きな生涯でした。私のこともあちらこちらに書いてくださっており、私にとりましては、大きな別れの大切な記録ともいべき本です。少々気恥ずかしい気持ちもありますが、敢えて紹介させていただきます。「別れの時」とも題すべき、全編愛に溢れた、品格のあるエッセイ集です。そして、ここに登場する人物の多くは、やはり、先生の教え子たちです。ここには、生涯一教師を自覚しておられた先生の、何とも温もりにみちた人間の風景があります。この本に、じつは、先ほどお話をいたしました寺脇良郎教授の思い出が記された一頁があるのです。

最近この本を読み返しているうちに、私と同じように先生を師と仰いだ人が、大学の最終講義の結びに先生を偲んでいたことをあらためて知りました。私が病気でお世話になった寺脇教授その人です。教授の講義

にも、人と人が出会い、そして、別れることの意味を示唆するものが秘められています。私は迷わず、西村数先生と教え子寺脇良郎教授の往復書簡のうち、先生のお手紙の一端に触れて、この講義の責めを果たせてもらおうと思ったのであります。先生は、卒業後の寺脇良郎君と題する一文を書き残しておられます⁽¹⁶⁾。これは、そのまま引用させていただきます。

〈…卒業五十年後の寺脇良郎君

寺脇君は、おとなしい 聡明な少年であった。

東大医学部を受験するのでも、悲愴な顔をするでもなく 受験から帰って来た時も 何か問うても口数少なく答えていた。

まるで ジュリアス・シーザーのようなものだと思った。すなわち、「来たり」「見たり」「勝ちたり」

東京へ行きました 試験がありました 合格しました
という顔であった。

それから五十年たって 或る日思いがけなく手紙をもらった。

「最終講義を終えました。講義の結びに「塔の上なるひとひらの雲」を引用しましたが、これは高校三年国語の時間に先生に教えて頂き、ずっと心に残っていた歌でした。その折りに洩らされた先生のこの歌の御感想を、そのまま先生の言葉として聴衆の学生や、同僚の教授達に伝えたことでした」とあった。

講義の抄録も同封されていたが、なるほど その末尾に次の歌が記されていた。

行く秋のやまとの国の薬師寺の塔の上なるひとひらの雲

佐佐木信綱

読み終わって私は涙が出た。

言葉は五十年後も生きていたのだ。

……………〉

行く秋のやまとの国の薬師寺の塔の上なるひとひらの雲

かの佐佐木信綱の名歌であります。文化勲章まで受章したこの人の門

(16) 西村数『桔梗庵雑記』（シャプラン社、2006年、P.228）

別　　れ　　の　　時

下生には、川田順、九条武子といった人たちがいます。門外漢の私には、この歌について批評する資格などまったくありませんが、三十一文字が、ただじつに美しい。その美しさは何か。のちに医学の研究者となる一人の高校生の胸に生きつづけた、そして、おのれのつとめた大学医学部の最終講義に、高校時代の恩師とその教室を偲ばずにはおられなかった何ものかでありましょう。

晩秋の大和路の深く青く澄んだ空に建つ、名利薬師寺の塔が静かに浮んでまいります。かの亀井勝一郎がこよなく愛した三重の塔。その亀井夫人が亡き夫を偲んで言葉を失った美しい塔。その上に浮ぶ、ただひとひらの雲。じつに美しいとしか私には言いようがありません。それは言うまでもなく、佐佐木信綱という歌人のもつ良質の感性の力であり、日本の短詩型文学そのものの持つ力でありましょう。同時にそれは、教え子寺脇良郎教授を讃える、一人の教師の表白する言葉の力とも重なるものであり、その奥にひそむ西村数という人格の、そして師と弟の交わりの奏でる韻律の力でもありましょう。

私は先ほど、わが生涯の師と申しましたが、正しくは、わが心の常佳の師と言うべきでしょう。今はもう先生はこの世にありません。にもかかわらずその師恩は、その出会いと別れは、永く人々の中に生きつづけるものです。

人はつねに別れを背負っており、それゆえに生の無常むじやうに耐えなければなりません。しかしその生の条理ちりりと不条理ふちりりを一つにした非条ひじょう理りそのものを、日々に新たに珠玉のごとく慈しまねばならぬのが、よく生きてゆくということの意味であります。

さて、いよいよ時間が来たようです。いささか言葉の足りぬ、拙つたない講義となりましたが、長年お世話になったみなさん、本日ご聴講くださった学内外のみなさんに、満腔の感謝を捧げて私の最終講義を終らせていただきます。ご清聴まことにありがとうございました。(拍手)

あ　と　が　き

この講義録は、平成23年3月16日、鹿児島純心女子学園を辞するに際しておこなった私の最終講義の記録です。当日の表現の不適切さや言い

足りなかったこと、言い忘れたことなどを補うために、いくらか加筆した箇所もありますが、拙^{つたな}い内容ながら、勇を鼓して忠実に再録したつもりです。

『論語』の「先進編」に、「未だ生^{いま}を知らずんば、いづくんぞ死を知らんや」という有名な章句があります。ところがこの章句は、これまで至極あっさりとして「生のことが分からないのに、死のことが分かるはずがない。死のことを考えるのは意味がない…」といったふうに解されてきました。これに対して中国哲学の加地伸行氏は、孔子がいかに死について深い目を注いでいたかは論語全体を読めば分かることであって、そのような解釈は大きな誤解だと指摘しています。東洋のモラリストとも言うべき、そして乱世と逆境の中を生きぬいた精神の巨人が、真正面から生と死を見つめなかった筈はけっしてないのです。

生を深く考えることは、じつは死を見つめることです。死は、つねに生のうちにあるのであって遠いかなたにあるのではない。その非条理の生を、こよなくいとおしむことがよく生きることにほかならないのだと思います。言葉をかえれば、いのちの「いま」を大切に生きようとすることです。そして、その深い自覚が、たぶん「哲学する」ということであらうと思います。この講義は、そんなことを考えながら、あちらの岸辺に立ち、こちらの岸辺に立ちして、うろうろしながらもそこから見えてくる生のありようを写しとったものです。月並みな言い方になりますが、私の心の風景とも思っていたいただければ幸いです。

なおこの日は、講義のあと、純心女子大の藤尾清信教授がショパンの「幻想即興曲」（嬰ハ単調作品66）を弾いてくださっています。不肖私の講義にちなんだものでした。足を運んでくださったみなさんが、深い感銘を受けて会場を後にされたことは言うまでもありません。また、講義の実施に関わって、短大地域人間科学研究所の河野一典教授（現所長）をはじめとする、所員のみなさんのほか、教職員・学生のみなさんから、これまた言葉に尽くせぬほどのお心遣いをいただきました。ここに付記して、私のささやかな感謝のしるしとさせていただきます。

平成23年 秋

参 考 資 料

阿部次郎 (1883-1959)

哲学者。旧制一高時代は文芸部員として、上田敏、ゲーテ、シラー、イブセンらの作に親しみ、岩波茂雄、安倍能成、斉藤茂吉らと親交を持つ。東大哲学科で、ケーベル、波多野精一らに傾倒、『スピノザの本体論』を書いて卒業。渡欧後東北大学教授（美学）として赴任。主著に『三太郎の日記』、『人格主義』など。

谷川俊太郎 (1931-)

大学へ進まず詩人として注目される。処女詩集『二十億光年の孤独』に三好達治が序文を寄せる。テレビ・映画の脚本、翻訳、合唱曲の作詞なども手がける。訳詩集『マザー・グースのうた』で日本翻訳文化賞、詩集『日々の地図』で読売文学賞。父は哲学者谷川徹三（1895-1989）。旧制一高・京大哲学科の先輩三木清らと京大で西田幾多郎に学ぶ。法政大総長など。

佐佐木信綱 (1872-1963)

国文学者・歌人。佐々木弘綱の長男。東大卒、万葉の基礎的研究に尽力。竹柏会を設立、機関誌「心の花」創刊。門下に川田順、九条武子。歌集に「思草」。文化勲章。

西村数 (1911-2006)

俳人。俳誌「郁子」主宰。「ホトトギス」同人。神宮皇學館卒。本名一意。県立高校長、鹿児島市指導課長、国際大学事務局長。主著に第一句集『草梅』、第二句集『初花』、第三句集『桔梗』のほか『あしの芽』、『南日本歳時記』、『桔梗庵雑記』、『俳句文法ノート』など。南日本文化賞。

M ハイデガー (1889-1976)

プラトン・アリストテレス以来の存在への問いを、新たな視点で立てることを課題とした主著『存在と時間』(Sein und Zeit, 1927)は、存在への問いの通路として人間存在を問うたものでもある。それゆえ、それはけっしてそのまま「実存哲学」と呼ばれる性格のものではなかったが、にもかかわらず、われわれがいま・ここに生きていることの意味について、さまざまな示唆を与えられる。

谷川俊太郎詩集『いまぼくに』 (理論社、2005年版より)

生　　き　　る

谷　川　俊　太　郎

生きているということ
いま生きているということ
それはのどがかわくということ

想林第3号

木もれ陽がまぶしいということ
ふっと或るメロディを思い出すということ
くしゃみすること
あなたと手をつなぐこと

生きているということ
いま生きているということ
それはミニスカート
それはプラネタリウム
それはヨハン・シュトラウス
それはピカソ
それはアルプス
すべての美しいものに会おうということ
そして
かくされた悪を注意深くこばむこと

生きているということ
いま生きているということ
泣けるということ
笑えるということ
怒れるということ
自由ということ

生きているということ
いま生きているということ
いま遠くで犬が吠えるということ
いま地球が廻っているということ
いまどこかで産声があがるということ
いまどこかで兵士が傷つくということ
いまぶらんこがゆれているということ
いまいまが過ぎてゆくこと

生きているということ
いま生きているということ
鳥ははばたくということ
海はとどろくということ
かたつむりははうということ
人は愛するということ
あなたの手のぬくみ
いのちということ

別　　れ　　の　　時

明日

ひとつの小さな約束があるといい
明日に向かって
ノートの片隅かたすみに書きとめた時と所
そこで出会う古い友だちの新しい表情ひょうじょう

ひとつの小さな予言があるといい
明日を信じて
テレビの画面あらわに現れる雲の渦巻きうずまき
〈曇くもりのち晴〉天気予報てんきよほうのつましい口調

ひとつの小さな願いがあるといい
明日を想って
夜したの間に支度する心のときめき
もう耳に聞く風のささやき川のせせらぎ
ひとつの小さな夢ゆめがあるといい
明日のために
くらやみから湧わいてくる未知の力が
私わたしたちをまばゆい朝へと開いてくれる

だが明日は明日のままでは
いつまでもひとつの幻まぼろし
明日は今日になってこそ
生きることができる

ひとつのたしかな今日があるといい
明日あしたに向かって
歩き慣れた細道とが地平へと導き
この今日のうちにすでに明日はひそんでいる

濱里忠宜教授略歴（はまさと・ただのぶ）

1950年京都大学文学部哲学科卒。鹿児島県で十年余公立高校の教壇に立ち、後年鶴丸高校長。その間、県教育長など教育行政の職25年。定年退職後、鹿児島純心女子短大で図書館長、副学長、地域人間科学研究所長、同女子大で副学長などのほか同学園理事。大学・短大の勤務は、県行政職在任中における非常勤職を含めれば26年余に。純心学園在任中、大学・短大の改革に携わり、三次にわたり改革委員長を務め学科、専攻、大学院などの創設に当たる。この時、全国で初めて「こども学」の名を公にする。

同大学、大学院、短大で哲学・人間学等を担当。著書に『心の風景』（講談社）、『若き旅人たちへ』（講談社）、『旅人燈』（南日本新聞社）、『遠い宴』（ぶどうの木出版）、人間論集『斜光の風景』（純心短大にんげん文庫）など。ほかに「時間性の文脈」「生の非条理」などの論文・エッセイがある。時事通信社「内外教育」巻頭コラム22年目を執筆中。現在、鹿児島純心女子短期大学名誉教授。西田哲学会会員。